カワウの生態と最新の生息状況

ＮＰＯ法人バードリサーチ
加藤ななえ

野生鳥獣の保護管理を目指すには、その対象種の生態をまず知らなければならない。

カワウはカツオドリ目ウ科に属し、集団で行動する傾向が強い大型の魚食性水鳥である。被害に関わる特徴として次のことを抑えておく必要がある。

1. **移動能力が高い**
   季節移動をする。
   通常の採食場所はねぐらから 10～15 ㎞の範囲である。
2. **魚食性である**
   捕まえやすく、たくさんいる魚が多く食べられている。
3. **集団性が強い**
   ねぐらやコロニー（集団繁殖地）を形成し、群れで採食をおこなうことが多い。
4. **繁殖期が長期化しやすい**
   条件さえよければ、カワウは一年中繁殖することが可能である。

管理においては、上記のようなカワウの習性を常に意識して上手に利用すべきである。集団性が強いことから、ねぐらやコロニーの場所を抑えてカウントすることで地域の季節ごとの生息数の変化を抑えることが可能となる。被害が起こる場所とねぐらやコロニーの位置関係を把握しないで、個体群の分布管理を考えていくことは難しい。採食地ではしっかり追い払いをすることが求められるが、ねぐらやコロニーでの追い払いは、分散や繁殖期の長期化を招くことあることから慎重に行なう必要がある。

カワウの生息場所は、1990 年代以降、北海道から沖縄まで全国に広がってきた。

カワウによる被害問題発生から 20 年以上経過してきた関東や中部、近畿の地域では、近年、カワウの総数はさほど変動していない様子がうかがえる。しかし分布回復の途上にあるような東北や九州などの地域では、調査が最近になって行なわれるようになってきたこともあり、いまだ増加の傾向にある。

地域によって生息状況把握のための調査方法、調査時期、調査精度などが異なっていることで、全体像が見えにくくなっており調整が必要である。また、対策だけではなく調査を継続させる予算の確保を理解してもらえるように、関係者間の情報共有に努める必要もある。調査をおろそかにすると、管理は進みません。